

海外で思い切り腕を試してみたい。世界有数の穀倉地帯に出かけて行って、農業ビジネスに挑む人たちがいる。日本の消費者や企業の食に対する「安全」「品質」志向の高まりは、日本流農業には追い風。グローバル化時代の農業のあり方を考えるヒントにもなりそう。

青森県つがる市の農業、木村慎一さん(57)は四月半ば、ウクライナに出発する。現地で農場約三百軒を借りて大豆栽培を始めるためだ。

「条件さえ整えば、一畝当たり四割とれる」。日本の二倍。一年前、首都キエフから二百数十キロ離れたポルタバの農場を訪れて木村さんは一目惚れした。世界一肥よくといわれる豊かな黒い土。雨が少なく、現地のやり方では収量が伸びないが、「深く耕し、地下の水分をとれるようにすれ

## 海外で日本流農業に挑む



ウクライナの肥よくな土地に一目惚れした木村さん。現地の農場も日本市場開拓を目指している

南米で日本が設立・運営した農業試験場

(国際協力機構の資料もとに作成、かっこ内は設置年)

アマゾン熱帯農業総合試験場 (ブラジル、1974)	1986年閉鎖。相手国政府に無償譲渡
パラグアイ農業総合試験場 (1962)	2010年に日系農協中央会に移管予定
ボリビア農業総合試験場 (1970)	2010年に日系農協に移管予定
アルゼンチン園芸総合試験場 (1977)	2004年に相手国政府に移管済み

### 肥よくな大地求め進出

「ば根が伸び、収量は上がる」を一九七六年に仲間と立ち上げ、タイコンの栽培、販売などを担当した。三年前、農地はウクライナの大豆協会幹部から借りる。当面の目標は一畝三ト。収量の半分をあらかじめ決めた価格で買い取る契約だ。

木村さんは大規模畑作のモデルとして注目された黄金崎農場(青森県深浦町) 頼まれ、現地を訪ねたのが

ウクライナに於ける大豆の指導をしてほしい」と頼まれ、現地を訪ねたのが

一年前。日持ちせず、手間もかかる野菜栽培より、大豆が最適と判断した。旧ソ連崩壊後の混乱で農業生産が落ち込んだウクライナは農業改革を重ね、輸出のチャンスを探っている。

ウクライナに於ける大豆の指導をしてほしい」と頼まれ、現地を訪ねたのが

ウクライナに於ける大豆の指導をしてほしい」と頼まれ、現地を訪ねたのが

### ウクライナやアルゼンチン 穀物相場高騰 追い風

アルゼンチンの日系人との交流が縁で、現地で農地約千二百軒を買収、日本向けの大豆やトウモロコシを生産する農場を経営するギアリンクス(岐阜県美濃加茂市、中田智洋社長)は、

かつて日本から北米や南米諸国に大勢の農業移住者が渡った。日本はブラジルはじめ南米各国に農業試験場を設けて現地の農業を指導。特にパラグアイが世界有数の大豆輸出国に育つきっかけをつくるなど、南米の農業発展に果たした貢献は決して小さくない。

日本の栽培技術水準は高く、発展途上国援助の現場では農業を指導するボランティアは引く手あまた。専門誌「農業経営者」を発行する農業技術通信社(東京・新宿)の尾吉則社長は「日本人が作ったこと自体をブランド化する好機。外食産業が海外進出し、需要は増える」と、海外営農の広がりを予測する。

木村さんもギアリンクスも非GMOや有機栽培にこだわり、日本で販路を開拓する。ウクライナやアルゼンチンの大規模な農業からみれば規模は小さいが、日本の農業者にもニッチならではの商機はある。

木村さんもギアリンクスも非GMOや有機栽培にこだわり、日本で販路を開拓する。ウクライナやアルゼンチンの大規模な農業からみれば規模は小さいが、日本の農業者にもニッチならではの商機はある。

(編集委員 樫原弘志)